

平成 30 年 7 月豪雨における避難行動に関する研究

石丸愛佳（北九州市立大学大学院社会システム研究科）

概要

2011 年東日本大震災において津波から逃げ遅れて巻き込まれた人は甚大な数に上る。逃げ遅れた原因が正常性バイアスや同調性バイアスといった認知バイアスであったことから意思決定を行うときに生じる考えの偏りが大きな問題となった（邑本、2020）。認知バイアスによる逃げ遅れを解消すべく本研究ではとくに同調性バイアスを取り上げて避難の判断に与える影響を分析する。その結果から素早い避難行動に繋げるための方策を考察する。

このため本研究では豪雨災害時における避難行動において避難判断に対して同調性バイアスが影響しているか、また避難行動時に参照点の変化があるかの分析を行うものである。ケーススタディとして 2018 年平成 30 年 7 月豪雨に被災した岡山県と広島県の在住者を対象にしたアンケート調査を行い、そのデータもとに同調性バイアスの影響と参照点の変化が住民の避難の判断に与えた影響を分析する。

データの統計学的解析の結果、同調性バイアスの分析では、家族など知り合いからの声かけと平時の同調性バイアスの強さが避難行動を促すのに効果的であることを明らかになった。また周囲の人々が避難している様子を見ても住民に対しては効果が見られないことを示した。

参照点変化の分析の結果、約 5 人に 1 人の割合で参照点が変わっていたことを明らかにしたが、数ある属性の中で唯一学歴が参照点の変化の有無に対して効果を有している一方で、性別、年齢、職歴等のその他の属性は、参照点の変化の有無に対して効果が見られないことを示した。

本研究の結果から、同調性バイアスを考慮すればあらゆるタイミングで知り合いからの呼びかけが避難判断を誘発しやすくなることがわかった。また避難の判断をするうえで基準となる参照点は最終学歴が高くなるほど変化しやすいことがわかった。南海トラフ巨大地震や首都直下型地震で被害が想定されている地域だけが防災教育に力を入れるのではなく、初等教育から義務教育や一般教育の中に防災教育を積極的に取り入れていくことが、その後災害に直面したときの適切な避難判断を促すためには必要不可欠なのではないかと考える。

キーワード：防災、豪雨、避難、同調性バイアス、参照点